

邪馬台国の時代⑮

～狗奴国と卑弥呼の死～

河村哲夫

筑紫と肥前に関する基本的な問題

以前、この連載の第 14 回「奴国から不弥国へ」のなかで、次のように述べたことがある。

「筑紫の起こりは、おそらくは筑紫神社(筑紫野市原田)付近であろうが、やがて筑前と筑後に拡大し、奈良時代には筑紫の島といえば九州全体をさすようになった。

まるで、邪馬台国の拡大の軌跡のようではないか。

このような筑紫と邪馬台国との関係のほか、筑紫と肥前との関係においても、次のような根本的な問題が存在している。

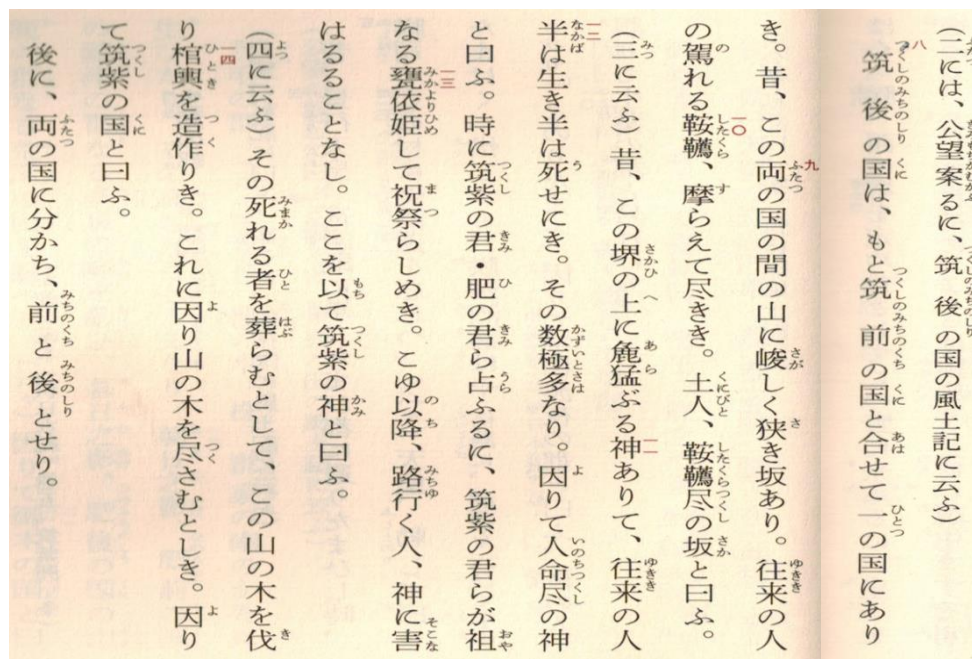
- (一) そもそも何ゆえ筑紫平野が筑紫と肥前に分割されたのか。
- (二) 何ゆえ肥前と肥後は有明海をはさんで位置しているのか。
- (三) 肥前と筑紫の国境は何ゆえ筑紫神社を起点にしたほぼ南北の直線で定められたのか。
- (四) 筑紫および脊振山南麓の肥前地方に広く分布する「荒ぶる神」伝承とは一体何か。

筆者としては、これらの問題はすべて『魏志倭人伝』に記された邪馬台国と狗奴国との対立の残影とみている」

今回は、この問題について論じたい。

筑紫の由来

『釈日本紀』に引用された『筑後国風土記』逸文に、「筑紫」の由来が書かれている。



○風土記

奈良時代の和銅6年(713)5月元明天皇は全国の風土記の編纂を命じた。

730年代にはほぼ完成したとみられる。ただし、現存するものは全て写本で、『出雲国風土記』がほぼ完本、『播磨国風土記』、『肥前国風土記』、『常陸国風土記』、『豊後国風土記』が一部欠損した状態(要約版)で残る。『筑前国風土記』『筑後国風土記』などの多くの風土記は散逸し、後世の書物に引用された逸文として一部残るのみである。

○『釈日本紀』

鎌倉時代末期の1274~1301年ごろト部兼方によって書かれた『日本書紀』の注釈書。『上宮記』、『日本紀私記』、『風土記』など、現在では失われてしまった原本を直接参照して記述している。

ト部兼方は鎌倉時代を代表する学者・神道家で記紀にも精通しており、彼が引用した風土記逸文についても信頼性が高いとみられる。

<筑紫の由来について>

	説	理由	備考
①	「木菟(ミミヅク)説 ミミヅク→ツクシ	九州島がミミヅクの形に似ていたことに由来(ト部兼方)	九州全体の形を認識したのは律令時代以降
②	「鞍轡尽しの坂」説 筵・・稲葉を編んで作成	馬の鞍下の筵が尽くし(破れ)たことに由来	魏志倭人伝では、弥生時代に「牛馬なし」
③	「人の命尽しの神」説 命・・戦死者?	筑前と筑後の境界にいた「籠猛(あら)ぶる神」が人の命を尽くし(殺した)ことに由来	脊振山地南部の「肥前国」に分布する「荒ぶる神」伝承
④	「山の木尽し」説 木・・木棺で死者を埋葬	木棺をつくるため木を尽くし(乱伐)したことに由来	奴国・・・カメ棺 邪馬台国・・木棺・石棺

上記のように、『筑後国風土記』逸文のなかに、筑紫に関する4つの説が紹介されている。

①以外の②③④とも、筑紫は「尽くし」に由来するというのが共通の認識となっているが、いずれも、「滅亡させる」というようなあまりよろしくない意味である。

くわえて、「籠猛(あら)ぶる神」がいて、往来する人々の半分を殺したので、肥の君と筑紫の君が甕依姫(みかよりひめ)に祭らせたところ収束したという。

舞台は筑前と筑後の境界の山の険しい坂道である。

そこには、肥の境界もある。肥といっても、のちの肥前である。

筑紫の範囲

最狭義の「筑紫」は、御笠郡の範囲である。すでに述べたように、神功皇后がその御笠をつむじ風吹き飛ばされた逸話にちなんで、竈門山は御笠山に変えられ、**A**川は御笠川、**B**郡は御笠郡に変えられた。

筆者は、この**B**郡が筑紫郡であったとみている。「筑紫古文書」によれば、室町~戦国期には、筑紫神社(筑紫野市原田)あたりは、「三(御)笠郡筑紫村」と呼ばれていた。このあたりが、筑紫のルーツともいえる場所である。

やがて筑紫の領域は拡大し、大宝元年（701）に筑紫国は筑前、筑後の2か国に分割され、奈良時代になると、筑紫島といえは九州をさすようになった。

筑紫神社(筑紫野市原田)

『福岡県の神社』（アクロス福岡文化誌⑥・海鳥社）に筑紫神社のことが紹介されている。

筑紫神社

つくしじんじや

粥占祭で知られる
「筑紫」国号起源の古社

「筑紫」の名の起り

JR鹿兒島本線の原田駅はらだから北へ十分ほど歩くと筑紫神社。緑豊かな小高い丘の上に社殿がある。

筑前原田は筑後・肥前と接する三国の境で、江戸時代には長崎街道の宿場町として賑わった。一の鳥居から参道を進むと中ほどにある「元禄鳥居」（元禄十二（一六九九）年建立）の脇の道は、昔の街道の名残といわれている。

この神社の歴史は古く、平安時代の『延喜式』神名帳によれば、名神大社で「筑紫国魂つくしくにたまの神」を祀り、それが「筑紫国」の名の起りこりと伝えている。

祭礼の時などに氏子たちが着るハッピの襟には、「国号起源」「筑紫神社」の文字が見える。「筑紫」という名にこめられた人々の誇りのように。

粥かゆに生えたカビで豊凶を占う

古代から、未来の吉凶を知るための様々な占いがある。その一つ「粥占かゆら」は天候や農作物の出来を占うもので、農民にとって最大の関心事であった。

この神社の粥占祭は厳粛な神事である。「粥入れ」は二月十五日。神井の水で米を洗い、古代からの方法で火をおこす。竈かまどで四、五十分間、絶えずかき混ぜながら炊き上げた粥を銅の鉢はちに丸く盛る。それを柳箸で十文字に区切



って、筑前（北）・筑後（南）・豊前（東）・肥前（西）の札を立てる。中心が筑紫神社である。

炊き上がったばかりの神粥は、白く



上：粥占祭。カビの生え方を見て評議を行う
左：御神木のオガタマノキ

艶やかに輝いていて「おかゆ様」とい
う昔からの呼び名がびつたりの感じ。
木箱に納めたおかゆ様を神事の後に神
殿の奥に安置する。

「粥出し」は一カ月後の三月十五日
早朝。宮司と氏子代表はおかゆ様の表
面のカビの状態を見て稲・麦の作柄、
虫害、天候、流行病などについての判
断をする。

古式豊かに受け継がれた粥占祭は、
飽食の時代に生き、科学万能と錯覚し
がちな現代の私たちに、火の神や水の
神、さらに八百万やおよろずの神々への
畏敬の念を思い起こさせる。

境内を彩る古木

神社の周囲には住宅やビル
が立ち並び、交通量も多いが、
一步境内に入ると生い茂る樹
木の靈気に包まれるのを感じ
る。樹木の種類が多く、それ
らが皆、風格のある古木で自

ずと心が落ち着く。

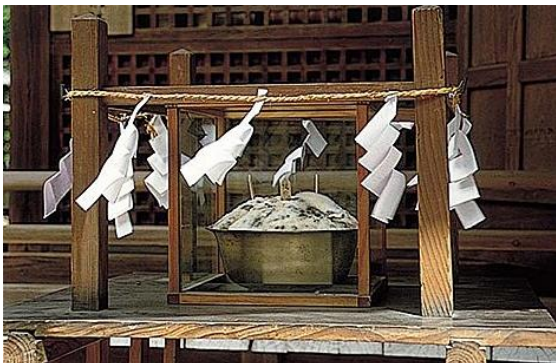
御神木のオガタマノキは高さが二〇
メートルほどもある大木で、秋になる
と神楽で用いる鈴に似た形の実をつけ
る。椿は三十種以上もあって、二月末
から多様な花をつけ、目を楽しませて
くれる。桜の中には「十月桜」という
珍しい品種の木があって、十月頃から
冬の時期に次々に咲き続け、一、二月
頃の花はピンクの色が濃くなるという。
近頃は、若い人の参詣も多くなって
いるそうだ。日常とは異なった清々し
い雰囲気の中で、神に祈り自分を見つ
め直すことは、明日へのエネルギーと
もなるのであろう。

〔高瀬〕

所在地 筑紫野市原田二五五〇
主祭神 白日別神・五十猛命・玉依姫命・坂
上田村麿
メ モ 粥占祭は市指定無形民俗文化財。い
つ頃始まったかは定かでないが、粥を盛る
銅鉢には「文化二乙丑年」の銘があり、一
八〇五年には行われていたことがわかる。

筑紫神社の粥占い

毎年3月15日に粥占いが行われ、筑前・筑後・肥前・豊前の収穫を占う。



筑紫神社の創建

創建年代は不詳であるが、

- (1) もと城山(きやま)の山頂に祭られていたが麓に移されたという説(『筑前国続風土記拾遺』)
 - (2) 当初から現在地に祭られていたという説(『筑前国続風土記』)
- と、2つの説がある。

城山(きやま)とは、萩原南方にある基山(きざん・404メートル・佐賀県基山町・福岡県筑紫野市)のことで、天智4年(665)に大野城(太宰府市・大野城市)とともに基肆(きい)城が築かれたことで知られている。



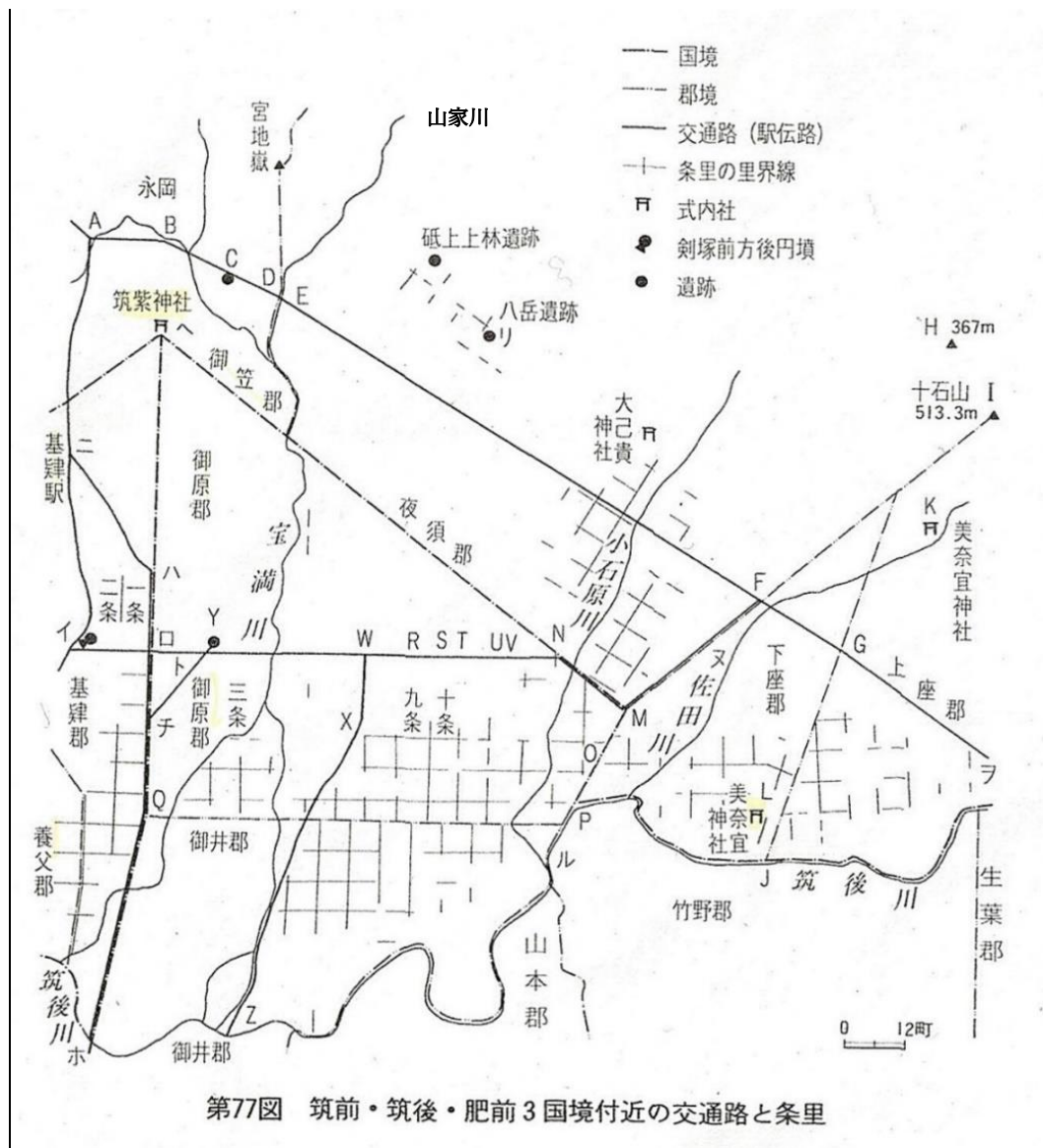
『筑前国続風土記』には、

「城山(きやま)は太宰府の南西方向、萩原村の上にある高い山である。俗に坊中山というのは、昔、寺院が多かったことによるのであろう。『日本書紀』天智天皇四年(665)八

月に、椽(き)城を築かれたという記事がある。城山というのも、城があったからそう名付けたのであろう」

と書かれている。

『小郡市史』に次のような地図が掲載されている。



① 筑紫神社を起点とした南北の直線(へ・ハ・Q)とやや西南の直線(Q・ホ)

これは、肥前と筑紫の国境である。

西側の基肄(きい)郡・養父(やぶ)郡は肥前国に属する。

東側の御笠郡・夜須郡・下座郡・上座郡は筑前国に属する。

東側の御原郡・御井郡は筑後国に属する。

筑紫神社は肥前・筑前・筑後の三国境界の基準点とされていると同時に、基肄(きい)郡・御笠郡・御原郡の三郡境界の基準点とされている。

したがって、筑紫神社の位置が変わると、国境・郡境とも変動することになるので、これは動かすことのできない絶対的な基準点である。この基準点を動かすと、極端に言えば、九州全体の国境・郡境が変動することになってしまう。

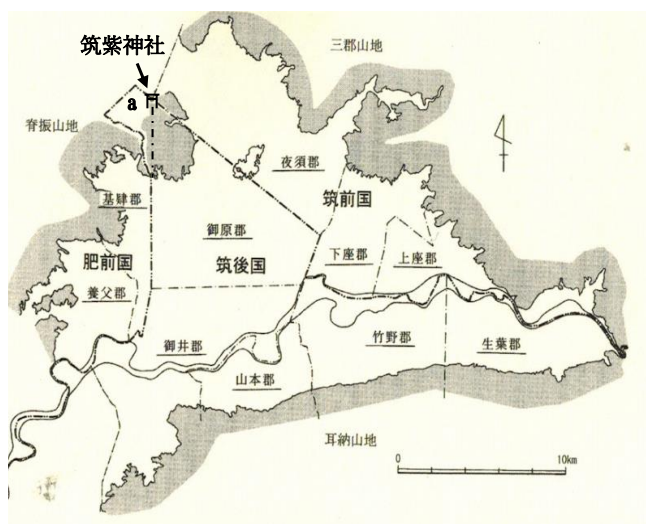
原図は条里田整備のための奈良時代ごろの情報を盛り込んだ図面のようなものであるが、筑紫神社の位置が当初から現在地に祭られていたという説を大きく補強するものである。

② 筑紫神社を起点とした東南方向の直線 (へ・N・M)

- ・この直線は城山(ジョン山、130.9メートル)の頂上を通過する。
- ・この直線は北側の御笠郡・夜須郡と南側の御原郡との境界である。
- ・この直線が宝満川と交差した地点から宝満川に沿って上流に進み、さらに支流の山家川に沿って進んで、宮地岳山頂の真南地点から山頂めがけて伸ばした直線の西側が御笠郡で、東側は夜須郡である。
- ・この直線の M 地点から東北方向の十石山(513.3メートル)の頂上と直線で結ぶと、その西側が下座郡で、東側が上座郡である。

説明すればきりがないのでこのあたりでやめておくと、いずれにしても、筑紫神社があたかも北極星のごとき不動の基準点として、国割・郡割が行われたことが理解できるであろう。

ただし、江戸時代には筑紫神社を起点にした南北の直線が、長崎街道の整備の影響もあってか、佐賀県側に食い込んでいる(a)。



このため、江戸時代には筑紫神社から 2.3 キロメートルほど南下した三国坂の峠付近の険しい山の上に「三国境石」が設置された。

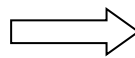
現在では、住宅団地開発や九州縦貫自動車道、国道の整備などによって、三国坂の峠自体が消滅し、麻生学園小学校(小郡市希みが丘)の敷地の一部となっている。



三国境石

- | | |
|----------------|-----------|
| 美しが丘 (福岡県筑紫野市) | • 旧筑前国御笠郡 |
| 希みが丘 (福岡県小郡市) | • 旧筑後国御原郡 |
| けやき台 (佐賀県基山町) | • 旧肥前国基肄郡 |

また、三国坂 (麻生学園小学校) を原田側 (筑紫神社方向) へ下ったところに、旧道に埋まった「従是北筑前国」の国境石がある。



なお、小郡市三沢には、「従是東南筑後国」の国境石がある。



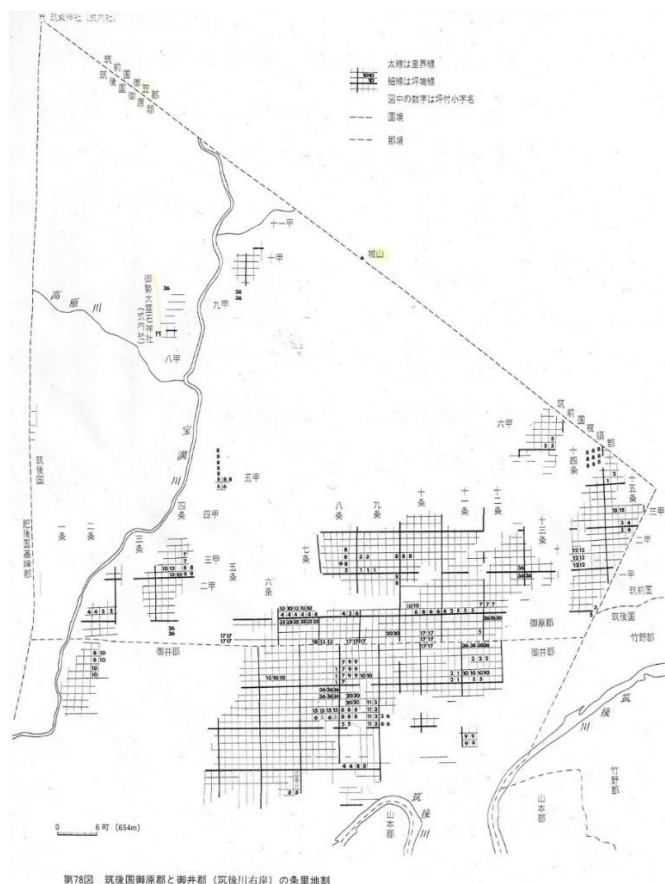
話を戻すと、そもそも筑紫神社を基準として筑前・筑後・肥前の国割が行われたことを、いったいどう考えるべきなのか、というのが今回の大きなテーマの一つである。

前述したように、筑紫神社を起点とした南北の直線(へ・ハ・Q)とやや西南の直線(Q・ホ)で、筑紫国(筑前国・筑後国)と肥前国の境界線が引かれている。

その境界線の東側には宝満川が北から南へ流れている。

宝満川を国境線にすれば、見た目にもわかりやすいはずである。

にもかかわらず、朝鮮半島の38度線のように、人為的な国境線が引かれている。



そもそも、筑紫平野の一角に肥の国があること自体が不自然である。

佐賀平野もまた筑紫平野の一部であり、福岡県側の筑前・筑後あるいは玄界灘沿岸地域の末盧国、伊都国、奴国、不弥国とおなじく稲作文化が普及し、奴国を中心とするカメ棺文化圏に属していた。

佐賀平野は、何の違和感もなく北部九州文化圏を占める地域であった。それなのに、肥の国になっている。

備前(岡山県)・備後(広島県)や越前(福井)・越後(新潟)のように、畿内(奈良・京都)に近い方が「前」、遠い方が「後」である。上総(千葉県中央部)・下総(千葉県北部・茨城県西部)もおなじく畿内(奈良・京都)に近い方が「上」、遠い方が「下」である。

ところが、肥の国は畿内に近い方が肥後、畿内から遠い方が肥前となっている。

実に奇妙で、畿内の存在を無視した国名となっている。

肥前は筑前、肥後は筑後をそれぞれ意識して国名をつけている印象すら受ける。



いずれにしても、以上述べたことは、

- ① 筑紫平野が筑紫と肥前に分割されていること
 - ② 肥前と筑紫の国境が筑紫神社を起点にしたほぼ南北の直線で定められていること
- という事実関係についてである。

荒ぶる神

次に、「荒ぶる神」についてである。

『筑後国風土記』逸文に「麿猛(あら)ぶる神」として登場し、往来する人々の半分を殺したので、肥の君と筑紫の君が筑紫の君の祖の甕依姫(みかよりひめ)に祭らせたところ収まったという逸話については前述したとおりである。

そのときには触れなかったが、筑紫の君とともに、すでに肥の君が登場していることが注目されよう。

「麿猛(あら)ぶる神」を鎮めるため、筑紫と肥の代表者が会盟し、甕依姫という筑紫の女性(女王的な巫女であった可能性もある)が祭祀を行ったというから、まるで戦争終結の和平の儀式のようでもある。

肥前の荒ぶる神伝承

『肥前国風土記』にも、脊振山南麓一帯の「荒ぶる神」伝承を記している。やや意識しながら紹介すれば、次のとおりとなる。



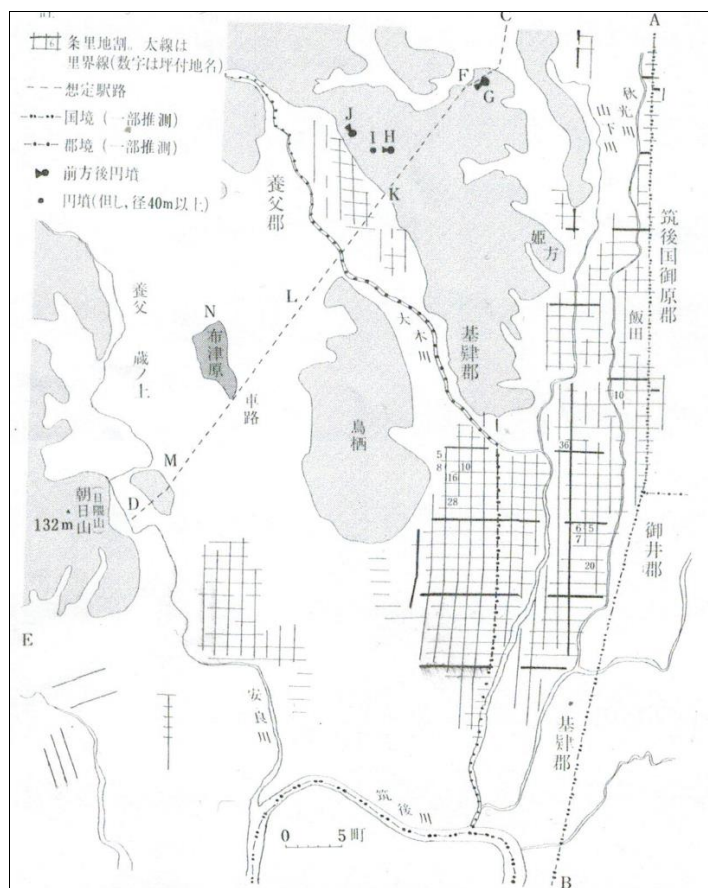
(1) 基肄郡・姫社(ひめこそ)の郷(鳥栖市)——姫古曾神社(鳥栖市姫方)付近一帯

「この姫社の郷のなかに川がある。名を山道(やまじ)川(山下川)という。その源は郡の北の山から出て、南に流れて御井の大川と出会っている。

むかしこの川の西に**荒ぶる神**がいて、道行く人の多くが殺害され、死ぬ者半分、死を免れる者半分という具合であった。そこでこの神がどうして崇めるのかそのわけを占って尋ねると、その占いのしめすところでは、『筑前国宗像郡の珂是古にわが社を祀らせよ。もしこの願いがかなえられたら凶暴な心はおこすまい』とあった。そこで珂是古という人物を探し出して神の社を祀らせた。珂是古は幡(はた)を手に捧げて祈り、『本当に私の祭祀を必要とされているなら、この幡が風の吹くまま飛んでいって、神のもとへ落ちよ』といい、ただちに幡を高く上げて風に乗せて放してやった。するとその幡は飛んでいき、御原郡の姫社の社に落ち、ふたたび飛んで帰ってきて、この山道川付近の田の村に落ちた。珂是古はおのずから荒ぶる神のおいでになる場所を知った。その夜の夢に、臥機(クツビキ)と絡罫(タタリ)が舞をしながら出てきて、珂是古を押さえてうなされた。そこでまたこの荒ぶる神が女神(ひめがみ)であると知り、さっそく社を建てて祀った。それからあとには道行く人も殺されなくなった。そういうわけで、姫社といい、いまは郷の名となった」

要するに、山道川——現在の山下川の西側に荒ぶる神がいた。

- ① 姫古曾神社(佐賀県鳥栖市姫方)あたりから幡を飛ばした。
- ② 御原郡の姫社の社=媛社神社(福岡県小郡市大崎)に幡が落ちた。
- ③ 荒ぶる神は女神であった。
- ④ よって、姫社を祭った。



(2) 神埼郡 (神崎市)

「むかし、神埼の郡に**荒ぶる神**があった。往来の人が多数殺害された。景行天皇が巡狩されたとき、この神は和平（やわらぎ）なされた。それ以来二度と災いを起こすことがなくなった。そういうわけで神埼郡という」

① 景行天皇は第12代天皇。安本美典氏の「統計的年代論」によれば、活躍年代は370～385年ごろとされている。

② 荒ぶる神伝承がそのころまで継承されていたことをしめしている。

なお、この郡には吉野ヶ里遺跡がある。

(3) 佐嘉郡

「郡の西に川がある。名を佐嘉川(嘉瀬川)という。この川上に**荒ぶる神**があった。往来の人を半分は生かし、半分は殺した。そこで県主らの先祖の大荒田(おおあらた)が神意を尋ねると、土蜘蛛の大山田女(おおやまだめ)・狭山田(さやまだめ)という二人の女子の助言によって神を祭ると和んだため、大荒田は二人の女子を賢女(さかしめ)とよんだ。そういうことで賢女の郡とよび、なまって佐嘉の郡とよぶようになった」

九州農政局の資料によると、有明海の海岸線の推移は次のようになっている。

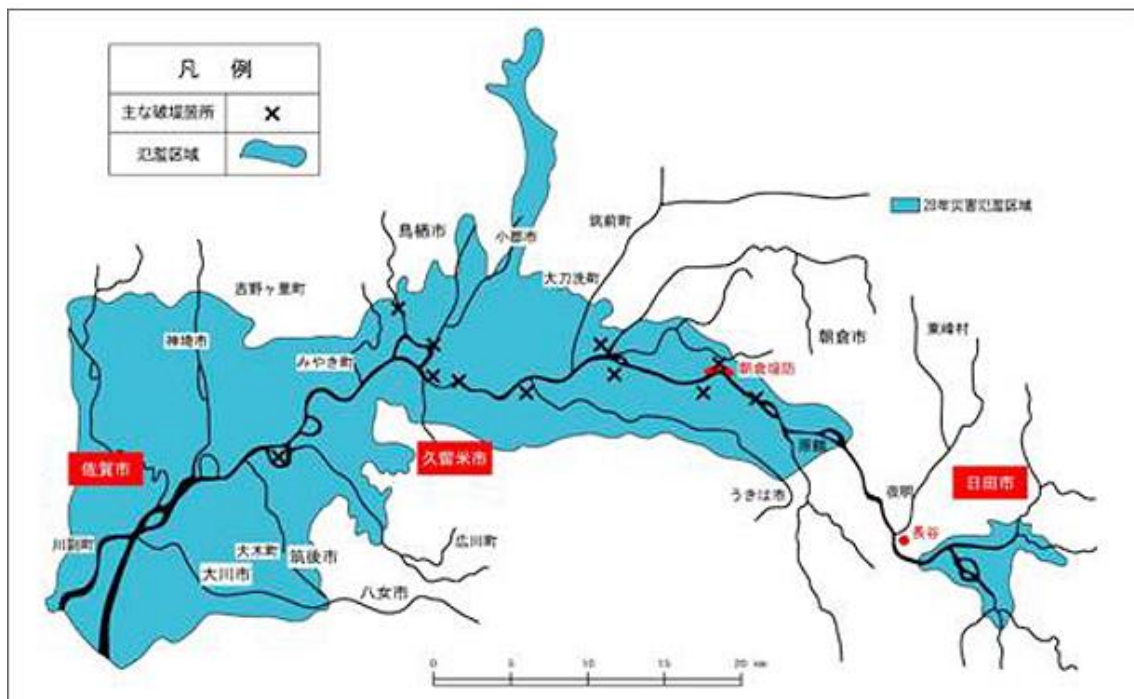


弥生時代の海岸線は、標高 5 メートルあたりといわれているから、佐賀平野のかなりの部分が海没していたことになる。

下図は、建設省(現国土交通省)作成による昭和28年(1953)の大洪水氾濫区域である。

図らずも、古代の海岸線が出現している。

脊振山に近い内陸部の吉野ヶ里遺跡も、臨海部に位置している。



邪馬台国と狗奴国の戦争

繰り返しになるが、

- (一) そもそも何ゆえ筑紫平野が筑紫と肥前に分割されたのか。
- (二) 何ゆえ肥前と肥後は有明海をはさんで位置しているのか。
- (三) 肥前と筑紫の国境は何ゆえ筑紫神社を起点にしたほぼ南北の直線で定められたのか。
- (四) 筑紫および脊振山南麓の肥前地方に広く分布する「荒ぶる神」伝承とは一体何か。

という問題は、すべて『魏志倭人伝』に記された邪馬台国と狗奴国との対立の残影なのではないか——とみている。

肥後——つまり狗奴国の勢力は、どういわけか筑後・日田方面からの進撃を避けているようにみえる。証拠はある。現在に至るまで筑後と豊後は健在であり、肥前でも肥後でもないからである。

菊池川は有明海につながっている。菊池川の河口は玉名である。玉名の対岸は島原である。現在でも玉名の長洲（ながす）港と島原の多比良港の間（約 14 キロ）が定期フェリーで結ばれている。古代人にとって、わけもない距離である。

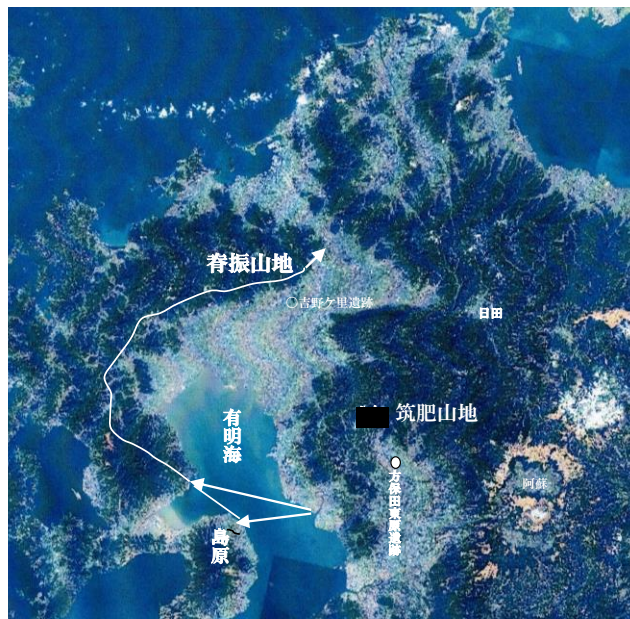
肥前の藤津郡方面でも約 20 キロの距離である。干満さえ読み間違えなければ、楽々と渡海することができる。

この有明海を使った迂回作戦と脊振山の山岳地帯を進軍する奇襲作戦を用いて、狗奴国は筑紫——邪馬台国の勢力に大きな打撃を与えたのではないか。

慌てふためいた卑弥呼は、帯方郡に助けを求めた。

そして、最終的に肥前の地は狗奴国の占拠するところとなり、筑紫平野の一角であるに

もにもかかわらず、肥の国と呼ばれるようになった。



国境線は、筑紫神社(当時は小さな祠であったろう)から南北の直線で引かれた。帯方郡から派遣された塞の曹掾史の張政の調停によるものであったかもしれない。

いずれにせよ、狗奴国の大戦果である。

「荒ぶる神」の伝承は、狗奴国の進撃で犠牲になった死者の記憶がもとになった可能性がある。

以上が、冒頭の問いかけに対する筆者の答えである。

そして、奈良・平安時代には、すっかり肥前国として定着し、7万人程度の人口規模になった。

7世紀末ごろ肥前と肥後に分割されるまでは、肥前も肥の国と呼ばれていた。

『筑後国風土記』逸文で、「肥の君」と書かれているのは、古い時代の情報を伝えているのであろう。

卑弥呼の死

筑紫平野の西方から奇襲攻撃を受けた邪馬台国は、肥前を放棄し、夜須・甘木朝倉方面の防備を固めるとともに、さらに東方の杷木や日田方面に政治・軍事の拠点を移したにちがいない。

前号まで述べた杷木・日田の評価が高くなったのは、このような邪馬台国の状況を反映している可能性がある。

そして、このようななかで、女王卑弥呼が死去した。

「邪馬台国の時代」の第1回で、次のように述べた。

「倭国大乱」は 178 年から 184 年の間に勃発し、卑弥呼が女王に共立されたことにより収束した。178 年と 184 年の中間を取れば、卑弥呼は 180 年ごろ邪馬台国の女王に即位したことになる。卑弥呼は 247 年ごろ死去している。247-180=67 年在位したことになる。後継者とおなじく 13 歳で女王になったとしても、80 歳前後で死去したことになる。当時の平均寿命はせいぜい 40 歳前後であろうから、異常な長命である。しかしながら、「桓霊の間」と「光和年間」を最初の手がかりに推論を進めていくと、このような結論にならざるを得ない。

はるか古代のことを考えはじめると、たちまち霧が立ち込め、常にあいまいさが湧き出でてくる。これが邪馬台国論に立ちはだかる最大の難敵である。

いまでもそう考えているが、霧が立ち込めると、つい空想の翼を広げたくなる。

もちろん、レンガや木材という素材だけでは家はできない。それらをつなぐ接着剤がなければ建物は組みあがらない。

歴史についても、文献史料などの基礎的素材から、空想力・推理力を接着剤として組み立てる必要があるが、過ぎたるは及ばざるがごとし。空想が過ぎると、どうしても小説になってしてしまう。「われ思う。ゆえに正しい」というやっかいな独りよがりの邪馬台国病に陥ってしまう。

長い道のりなので、たまには道を踏み外すこともあるかもしれないが、今後とも自戒しながら筆を進めていきたい。

それはさておき、卑弥呼の死である。

『魏志倭人伝』には、次のように書かれている。

「其の八年(正始八年・247)、(帯方郡)太守王頎(おうき)、官に到る(着任した)。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼と素(もと)より和せず。倭の載斯(さし)・烏越(あお)等を遣わして郡に詣(いた)り、相(あい)攻撃する状(さま)を説く。塞(さい)の曹掾史張政(ちょうせい)等を遣わし、因りて詔書・黄幢(こうどう)を齎(もたら)し、難升米(なしめ)に拜受せしめ、檄(げき)を為(つく)りて之に告諭(こくゆ)せしむ。卑弥呼以(もつ)て死す。大いに冢(つか)を作る。径百余歩なり。殉葬する者奴婢(ぬひ) 百余人なり」

- ① 正始八年——すなわち、西暦 247 年のことである。
- ② 帯方郡の新たな太守として王頎(おうき)が着任した。

下表のとおり、王頎は景初三年(239)から正始七年(246)まで玄菟郡太守を務めた人物で、高句麗王位居をウラジオストクあたりまで追撃した猛将である。

年	帯方郡太守	楽浪郡太守	玄菟郡太守
景初二年(238)	10~11 月ごろ劉昕着任	鮮于嗣が着任	
景初三年(239)	1~6 月ごろ劉夏に交替	劉茂に交替	王頎
正始元年(240)	2~4 月ごろ弓遵に交替	劉茂	王頎
正始五年(244)	弓遵	劉茂	王頎は扶余に糧食を求める
正始六年(245)	弓遵は濊を攻撃	劉茂は濊を攻撃	王頎は北沃沮に逃れた位居を追撃
正始七年(246)	韓を制圧。弓遵戦死	劉茂は韓を制圧	王頎
正始八年(247)	王頎着任	劉茂	
正始九年(248)	王頎	劉茂	

- ③ 卑弥呼は載斯(さし)・烏越(あお)らを帯方郡に派遣して、狗奴国と戦闘状態となったことを報告した。
- ④ そこで、帯方郡は、帯方郡は塞の守備隊長の張政らを邪馬台国に派遣し、正始六年(245)に下された皇帝の詔書と黄幢を直接難升米に授与し、檄文を発して激励した。
- ⑤ このような情勢のなかで、卑弥呼は死去した。
『魏志倭人伝』には、「以て死す」とあるのみで、その死に至った経緯や死因は不明である。
- ⑥ そして、卑弥呼を葬るための大きな墓【冢(つか)】が作られた。その直径は百余歩である。百余人の奴婢が殉葬された。

卑弥呼の墓と拠点の判断基準

すでに述べたように、伊都国のくんだりで、卑弥呼の墓の判断基準について述べた。

【判断基準①】卑弥呼の墓は「径百余歩」の規模であること。

後漢・魏の時代の「一歩＝六尺」で計算すると次のとおりとなる。

時代	一寸	一尺	六尺	×100	備考
後漢	2.30 cm	23.03 cm	1.382m	138.2m	140～150m
魏	2.41 cm	24.12cm	1.447m	144.7m	

- ・基本的には直径140～150mの円墳とみるべきであろうか。
- ・ただし、近畿説では前方後円墳たる箸墓の後円部直径約150メートルを「径百余歩」とみるなど恣意的に運用されているので、この判断基準①のみで決定することは適切でない。
- ・平原遺跡の1号墓は、東西約14メートル、南北約10.5メートルの長方形の方形周溝墓であるため、判断基準①に該当しない。曾根丘陵に恣意的に範囲を広げることは許されない。
- ・吉野ヶ里遺跡の北墳丘墓についても、南北40メートル、東西27メートルの規模であるため、判断基準①に該当しない。

【判断基準②】卑弥呼の墓の周辺に「殉葬者奴婢百人余」の殉葬墓があること。

『魏志倭人伝』の記事からみて当然の判断基準であろうが、卑弥呼の墓からどの程度の距離にどのような形態で存在するのか、そもそも殉葬墓が本当に存在するのかなど、実際の運用に当たっては難しい課題が予想される。しかしながら、判断基準①に適合した墓の周辺に約100名の殉葬墓が確認されれば決定打になる可能性を秘めている。

【判断基準③】親魏倭王の金印など魏の皇帝から授与された品々が出土すること。

- ・卑弥呼に授与された親魏倭王の金印や銀印青綬、紺地句文錦、細班華鬪、白絹、金八両、五尺刀二口、銅鏡百枚、真珠、鉛丹および絳地交龍錦、絳地縹粟鬪、倩絳、紺青などの品々
 - ・魏から授与された可能性が高い品々(大分県日田市出土の金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡など)
- ただし、三角縁神獸鏡について魏鏡説と国産説が対立していることなどをみても、科学的水準の高度化が急務である。

・近畿以外から出土した場合、安易な近畿からの流布説あるいは授与説が唱えられる可能性が高いので、「出土地優先主義」の原則を徹底する必要がある。

【判断基準④】卑弥呼と特定できる文書が出土すること。

・期待は薄いですが、魏の皇帝の詔書や帯方郡からの連絡文、卑弥呼の返書の写しなど、卑弥呼と特定できる文書類などが出土すれば決定的であるが、これまた近畿以外から出土した場合に近畿からの流布説あるいは授与説が唱えられる可能性が高いので、「出土地優先主義」の原則を徹底する必要がある。

以上が、卑弥呼の墓であるかどうかについて筆者がしめした判断基準であるが、「邪馬台国の時代⑬～投馬国は豊の国」においては、卑弥呼の所在地についての基準についても、次のように述べた。

① 卑弥呼と直接結びつく遺物が出土していること。

上記の【判断基準③】と【判断基準④】と同じ。

② 一般住民・集落との地勢的な隔絶性が認められること

以上を一覧表でしめせば次のとおりとなる。

卑弥呼の墓と拠点の判断基準

判断基準		留意事項
卑弥呼の所在地	卑弥呼の墓	
—	径百余歩 (140～150m) の大きさ	考古学的な調査が大前提 円墳の可能性が大であろうが、古墳時代の 8～9 割は円墳であるから、円墳に安易に飛びつくのは危険
—	卑弥呼の墓の周辺に奴婢百人余の殉葬墓があること	考古学的な調査が大前提 上記の判断とともに総合的な判断する必要あり
卑弥呼と直接結びつく遺物の出土【共通】 ① 親魏倭王の金印など魏の皇帝から授与された品々の出土 ② 卑弥呼と特定できる文書の出土		出土地優先の原則と近畿授与説の禁止がきわめて重要
一般住民・集落との地勢的な隔絶性 ① 古代の地勢 ② 古代の拠点性	—	—

これからみると、奈良県の箸墓と卑弥呼をつなぐ直接的な物証は何もないということがわかる。径百余歩 (140～150m) の大きさも、前方後円墳の後円部だけを恣意的に切り取って比較しているだけである。

纏向遺跡一帯が卑弥呼の拠点であるという物的証拠は何もない。桃の種が出て、ベニバナの花粉が出て、木製仮面が出て何の証拠にもならない。『魏志倭人伝』とはまったく無関係である。

卑弥呼と天照大神

本連載の5回目、邪馬台国の時代の第1回目に、天照大神と卑弥呼の類似性について述べたことがある。

二人とも「日(太陽)の巫女」というような名を共有しており、等しく独身の女神・女王で、弟がいた。

後継者についても、臺與(台与)と万幡豊秋津媛命は「とよ(豊)」を共有しており、豊の国を指し示しているかのごときである。

そういえば、投馬国も投与国=豊の国であった。

なお、『魏志倭人伝』は「壹與」つまり「壹与」とするが、『梁書』や『北史』、『翰苑(かんえん)』などは「臺與」つまり「台与」とする。

臺 と 壹

の二文字は、よく似ており、間違えやすい漢字である。

『魏志倭人伝』では、邪馬臺国についても邪馬壹国と書いており、古田武彦氏(1926～2015)が「邪馬壹国」説を発表して、てんやわんやの大騒ぎになったことはご記憶の方もおられよう。

これについても、『後漢書』や『梁書』、『太平御覧』、『隋書』などにより、「邪馬臺国」つまり「邪馬台国」が正しいとみられている。

以上を踏まえ、『魏志倭人伝』の伝える卑弥呼と『日本書紀』『古事記』が伝える天照大神を比較すると次のとおりとなる。

卑弥呼と天照大神の比較

	魏志倭人伝	日本書紀・古事記	備考
名	卑弥呼(日の巫女) (太陽を祭る女王)	天照大神 (太陽を祭る女神)	◎よく似ている
父	不明	イザナギ	-
夫	なし	なし	○似ている
兄弟	男弟あり	弟のスサノオ、月読命	○似ている
死亡	247年ごろ死亡	岩戸隠れ(日食?)	○247年3月の皆既日食
後継者	臺与(台与) 宗女(一族の娘)	万幡豊秋津師比売命(豊日雲) 高皇産靈尊の娘	○「とよ(豊)」が共通
後継者の夫	不明	天忍穗耳命(天照大神の長子)	△投馬国(投与国=豊国)の長官「耳」か
拠点	邪馬台国(山つ国)	高天原(高地)	○似ている
対外交渉	魏と外交交渉	欠	-
魏の称号	親魏倭王	欠	-
金印	あり	欠	-
墓	経百歩の塚	天の岩戸?	- 今後の課題
殉死者	百余名	欠	- 今後の課題
好物	鏡	鏡・玉	○似ている 後漢鏡の出土(福岡県)

『日本書紀』『古事記』には、中国との外交記事がいつさい出てこない。何か理由があるのであろうが、神国日本が中国への従属性を嫌ったからではなかろう。卑弥呼はわりと喜んで中国へ使者を派遣しているようであり、多くの返礼品も授与され、狗奴国との争いの際には、帯方郡に助けを求めている。卑弥呼＝天照大神は決して中国が嫌いではなかった。

伝承が長期間にわたり口伝で継承されるうちに、何らかの理由で脱落したのであろう。卑弥呼の時代から、『古事記』『日本書紀』に文字で記されるまで 400 年以上経過しているから、そのようなことも起こり得るはずである。

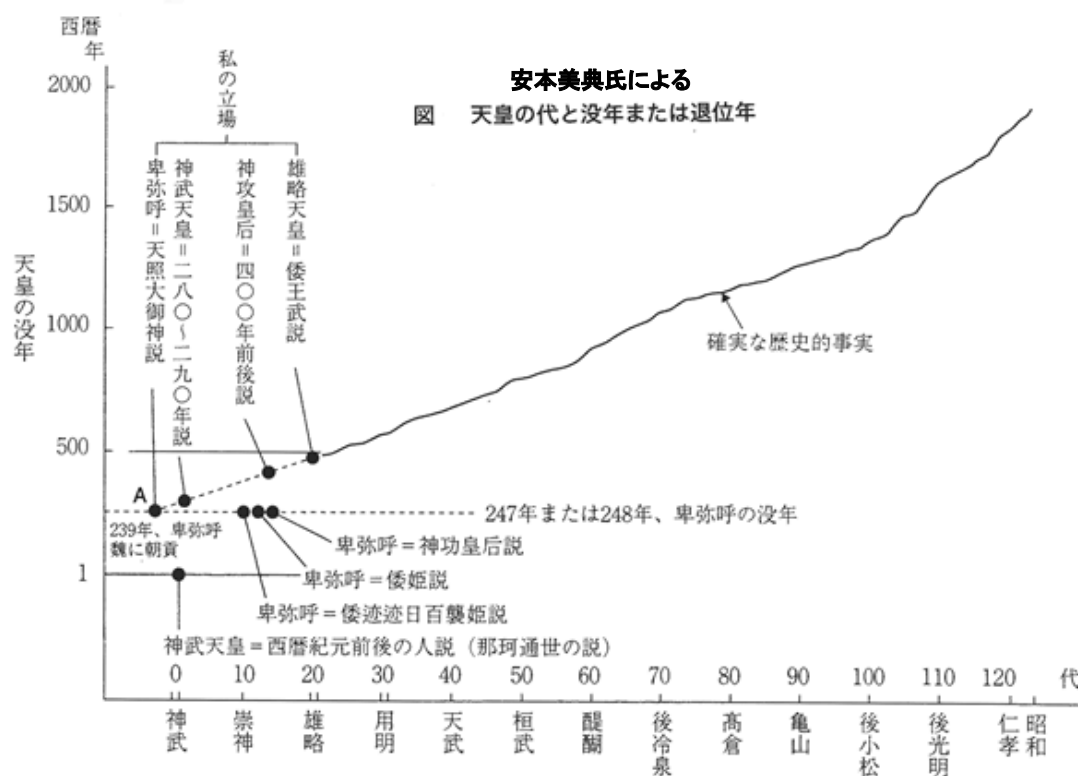
卑弥呼と天照大神の比較結果

よく似ている ◎	似ている ○	どちらともいえない △	比較できない -	似ていない ×	計
1	6	1	6	0	14

明確に比較できる項目に関していえば、◎と○が多数であり、卑弥呼と天照大神は同一人物の可能性が高いということになる。

安本美典氏の「統計的年代論」でもおなじ結果が出ている。

下のグラフのように、天皇の平均在位年数から推定すると、卑弥呼が生きていた時代と天照大神が活躍した時代が重なっている。



天の岩戸

筆者は、『古事記』『日本書紀』の古い神話のなかに、歴史の核が潜んでいるとみている。

事 件	神話の内容	歴史の核
イザナギの禊	黄泉の国(出雲)から帰還したイザナギは「筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原」で禊して、住吉三神・ワタツミ三神・天照大神・月読命・スサノオなどを生む。	筑紫のイザナギと出雲のイザナミの協調・連携とその破綻。
天の岩戸	スサノオの乱暴に怒った天照大神が天の岩戸に隠れると世の中は真っ暗になった。このため天の岩戸の前で祭祀を行い、天照大神を引っ張り出した。	天照大神の死と再生 日食
出雲の国譲り	高天原勢力は出雲の大国主命に出雲の国譲りを迫った。	九州の勢力の出雲・日本海方面への進出
天孫降臨	天照大神の孫・ニニギノミコトは日向高千穂へ降臨	北部九州勢力の九州南部方面への進出

『古事記』によれば次のとおり。

天照大神の弟のスサノオ(須佐之男命)は、高天原において、田の畔を壊して溝を埋めたり、御殿に糞を撒き散らしたりして暴れまわったが、天照大神はスサノオをかばった。

しかしながら、天照大神が幡屋で神に奉げる衣を織っていたとき、スサノオが屋根に穴を開けて、皮を剥いだ血まみれの馬を落とし入れたため、驚いた 1 人の天の服織女は梭(ひ)が陰部に刺さって死んでしまった。

ここで天照大神はついに怒り、天の岩戸に引きこもり、高天原も葦原中国も暗闇となり、さまざまな災いが発生した。

そこで、八百万の神々が天の安河の川原に集まり、対応を相談した。思金神の案により、さまざまな儀式をおこない、常世の長鳴鳥(鶏)を集めて鳴かせた。

鍛冶師の天津麻羅を探し、伊斯許理度売命(いしこりどめ)に、天の安河の川上にある岩と鉾山の鉄とで、八咫鏡(やたのかがみ)を作らせた。玉祖命に八尺瓊勾玉(やさかにのまがたま)を作らせた。

天児屋命と布刀玉命を呼び、雄鹿の肩の骨とははかの木で占い(太占)をさせた。賢木(さかき)を根から掘り起こし、枝に八尺瓊勾玉と八咫鏡と布帛をかけ、布刀玉命が御幣として奉げ持った。天児屋命が祝詞(のりと)を唱え、天手力男神が岩戸の脇に隠れて立った。

アメノウズメ(天宇受賣命)が岩戸の前に桶を伏せて踏み鳴らし、神憑りして胸をさらけ出し、裳の紐を陰部までおし下げて踊った。すると、高天原が鳴り轟くように八百万の神が一斉に笑った。

これを聞いた天照大神は訝しんで天の岩戸の扉を少し開け、「自分が岩戸に竈って闇に

なっているのに、なぜ、アメノウズメは楽しそうに舞い、八百万の神は笑っているのか」と問うた。

アメノウズメが「あなた様より貴い神が現われたので、喜んでいるのです」というと、天兒屋命と布刀玉命が天照大神に鏡を差し出した。鏡に写る自分の姿をその貴い神だと思った天照大神が、その姿をもっとよく見ようと岩戸をさらに開けると、隠れていた天手力男神がその手を取って岩戸の外へ引っ張り出した。

すぐに布刀玉命が注連縄を岩戸の入口に張り、「もうこれより中に入らないで下さい」といった。こうして天照大神が天の岩戸の外に出てくると、高天原も葦原中国も明るくなった。

八百万の神は相談し、須佐之男命に罪を償わせるため財産を没収し、髭と手足の爪を切って高天原から追放した。



『図説古事記日本書紀』(西東社)より

天の岩戸について、『日本書紀』本文および一書も、ほぼ『古事記』とおなじようなことを記しているが、細かい点では差異がある。

『日本書紀』の天の岩戸

本文	第七段一書 (一)	第七段一書 (二)	第七段一書 (三)
<p>・天照大神の機屋にスサノオが皮を剥いだ天斑駒を投げ込むと、天照大神は驚いて梭で自分を傷つけた。このため天照大神は怒って、天石窟に入り磐戸を閉じて籠ったので国中が常に暗闇となり昼夜の区別がつかなかった。</p>	<p>・稚日女尊（わかひるめ）の機屋にスサノオが天斑駒の皮を逆さに剥いで投げ入れた。驚いた稚日女尊は梭で体を傷めて亡くなった。このため天照大神は天石窟の磐戸を閉じたので天下が暗くなった。</p>	<p>・嘗（にひなへ）を行う時に、スサノオは新宮（にひなへのみや）の席の下にこっそりと糞をした。天照大神は気づかずに座ったため、体が臭くなり、怒って天石窟に入って磐戸を閉じた。</p>	<p>スサノオは自分の天杵田（くいた）・天川依田（かわよりた）・天口鋭田（くちとた）が天照大神の天安田（やすだ）・天平田（ひらた）・天邑田（むらあわせた）よりも痩せた土地だったため妬んで姉の田を害した。怒った天照大神は天石窟に籠った。</p>
<p>八十万神は天安河の河原に集まり相談した。</p>	<p>八十万神たちは天高市（あめのたけち）で相談した。</p>		
<p>・思兼神は常世の長鳴鳥を集めて鳴かせた。 ・手力雄神は磐戸の側に立った。 ・天兒屋命と太玉命は天香山の繁った榊を掘り起こし、上の枝に八坂瓊之五百箇御統（やさかにのいほつみすまる）、中の枝に八咫鏡、下の枝には青と白の布帛（ふはく）をかけ共に祈祷をした。 ・天鈿女命は天石窟の前立って舞い踊った。</p>	<p>・高皇産霊尊の子の思兼神が思案し、天照大神の姿を映し出すものを作って、招き寄せようと述べた。そして、石凝姥に天香山の金を採らせ、日矛を作らせた。また、美しい鹿の皮を剥いで天羽鞆（あめのはぶき）を作らせた。</p>	<p>・天糠戸神に鏡、太玉命に布帛、豊玉に玉を作らせた。また、山雷神（やまつち）に多くの玉で飾った榊、野槌神（のづち）に多くの玉で飾った小竹（ささ）を作らせた。それらの品々を持ち寄って、天兒屋命が神祝（かむほぎ）を述べたため、日神は磐戸から出てきた。</p>	<p>・天兒屋命は天香山の榊を掘り起こす。 ・石凝戸邊（いしこりとべ）は作った八咫鏡を上枝にかけ、（天糠戸の子） ・天明玉は作った八坂瓊之曲玉を中の枝にかけ、（イザナギの子） ・天日鷲は作った木綿を下枝にかけ、 ・太玉命は榊を持って祈る。</p>
<p>・天照大神は、豊葦原中国は長い夜になっているはずなのに、どうしてアメノウズメは笑い楽しんでいるのだろうと手で磐戸を少し開けて様子を窺った。すると手力雄神が天照大神の手を取って、引き出した。 ・そこで天兒屋命と太玉命が注連縄を張り渡し、「再び入ってはなりません」と申し上げた。</p>			<p>・天照大神は「今までこのような美しい言葉を聞いたことはない」と言って、磐戸を少し開けて様子を窺った。その時、磐戸の側に隠れていた天手力雄神が引き開けると、光が国中に満ち溢れた。</p>

天の岩戸日食説

天照大神の天の岩戸隠れについて、さまざまな説がある。

(1) 死亡説

天照大神の死去を意味しているという説。国文学者池田弥三郎が説き、哲学者和辻哲郎が紹介した。

(2) 火山説

火山灰で闇夜の如く空が暗くなったという説。物理学者で随筆家の寺田寅彦が説いた。

(3) 冬至説

冬至には太陽の光が最も弱くなる事から冬至との関係を説いた。民俗学者の折口信夫が説いた。

(4) 日食説

江戸時代の儒学者荻生徂徠（1666～1728）『南留別志』（なるべし）で説いた。

「日の神の天の磐戸にこもりたまひしといふハ、日食の事なり。諸神の神楽を奏せしといふハ、日食を救ふわざなるべし」

このうち、(4)の日食説について、「国立天文台報第 13 巻」(2010)に掲載された谷川清隆・相馬充氏共著による「『天の磐戸』日食候補について」は、

①「長鳴鳥を聚めて、互いに長鳴せしむ」（『日本書紀』）

「よく知られているように、皆既(日食)になると暗くなり、鳥や獣が騒ぐ。とくに鶏はときを告げる」

②「細に磐戸を開けて窺す」（『日本書紀』）

「これは、皆既(日食)が終わる瞬間に太陽が月の最大の凹凸から最初に光を投げかける、ダイヤモンドリング現象を説話化したものであると理解できる」

「このような皆既日食ならではの特徴的な文言があることから、筆者らは、皆既日食体験が伝承として残ったものと考える」

とされている。

そして、安本美典氏のことについても言及される。

「歴史学者の安本美典は、斉藤国治とは異なる論拠から、天照大神と卑弥呼を結びつけ、紀元 3 世紀、とくに紀元 247 年または紀元 248 年の皆既日食を「天の磐戸」日食にあてる（表Ⅲ参照）。

表Ⅲ. 安本美典の選んだ天の磐戸候補日食⁹⁾

(日食の日時は日本標準時).

年	月	日	オッポルツェル番号 (ユリウス暦)
247	3	24	3478
248	9	5	3481

安本は、実在する天皇の平均在位期間が 10 年であることを基本的事実とし、実在することの保証された最古の天皇から 10 年ずつ遡ると、神武天皇は西暦 280 年～290 年前後の人となり、その在位 5 代前の天照大神は西暦 230 年～240 年の人である、とする。そして、その時代の主権者が卑弥呼であることから、卑弥呼と天照大神を同一視する。当然の帰結として、候補日食は紀元 240 年前後のものとなる。それが、247 年と 248 年の日食である。たしかに、齊藤国治が 247 年日食を候補に挙げなかったのは不思議なことである。248 年 9 月 5 日と 247 年 3 月 24 日の日食の食帯図を図 2 と図 3 に示しておいた。248 年の日食は、パラメータ ΔT をどのように取っても、近畿、九州いずれでも皆既にならない。だから、「天の磐戸」日食の候補としては失格であると筆者らは考える。近畿でも北九州でもあたりは暗くならない。

次に 247 年 3 月 24 日の日食。この日食は、パラメータ ΔT の値によっては北九州でも近畿でも皆既になり得る。図 3 に見られるとおり、 $\Delta T=7,300$ 秒なら日本列島はどこも皆既にならないが、 $\Delta T=10,000$ 秒なら、北九州と近畿が皆既帯に入る。天皇の在位期間に関する有力な議論を加えると、247 年日食は、「天の磐戸」日食候補として有力である。しかし、残念ながら、次節で見るように、247 年当時は $\Delta T=7,300$ 秒あたりなので、この日食も候補から外れてしまう

「 ΔT の値を上記範囲であるとすると、247 年、248 年ごろは、直線内挿で $\Delta T=7,300$ 秒あたり。図 3 からわかるように、247 年日食は日本では皆既にならない。食分は北九州で 0.7 ないし大きくても 0.8、近畿では 0.3 ないし 0.4 だから、あたりはまったく暗くならない。また 248 年日食は、もともと皆既にならない。ただし、北九州でも大和でも、食分は最大で 0.9 になる」

以上が「国立天文台報第 13 巻」(2010)に掲載された谷川清隆・相馬充氏共著による「『天の磐戸』日食候補について」の概要である。

ところが、「国立天文台報第 14 巻」(2012)の「247 年 3 月 24 日の日食について」(相馬充、上田暁俊、谷川清隆、安本美典)の共同論文において、上記の見解を改め、

「西暦 247 年前後の地球時計遅れ ΔT の値を見積もる、西暦 247 年 3 月 24 日 (ユリ

ウス暦)の日食に関する記述が三國志と晋書にあることを見つけた。その記述によると、当該日食は洛陽において皆既でなく、深食であった。このことから $\Delta T > 7750$ 秒を得た。前論文 [1] で谷川・相馬は、西暦 247 年前後に $\Delta T = 8000$ 秒は大きすぎて本当らしくないと述べたが、この結論は訂正すべきかもしれない」

「247 年 3 月 24 日の日食は、北九州で皆既でないにしても深い日食であった。とくに、北九州の島および北九州市は皆既食を経験したと思われる」

とされ、

「天照大御神の天の磐戸伝承は卑弥呼の死と関係する、との見解がある。卑弥呼の死の前後と見られる紀元 247 年に、北九州で、皆既または皆既に近い日食があったことは、注目に値する」

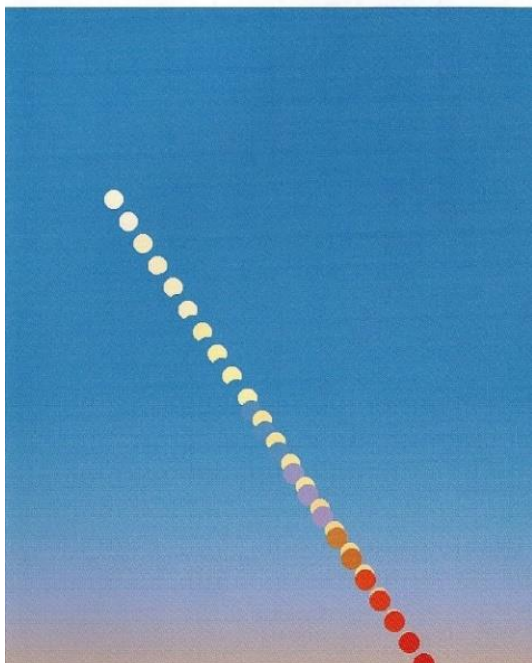
という文章で結ばれている。

安本美典氏は、『倭王卑弥呼と天照大御神伝承』(勉誠出版・2003)のなかで、247 年 3 月 24 日の日食について、(株)アストロアーツ社のパソコンソフト「ステラナビゲーター」を用いた皆既日食図を掲載し、「福岡市の上では皆既日食、奈良県の飛鳥の上では、皆既日食にならない」と注記されている。

248 年 9 月 5 日の皆既日食についても、「福岡市の上でも、奈良県の飛鳥の上でも、ほぼ皆既日食となる」と注記されている。

卑弥呼が死んだころ、福岡市の上空で、2年続けて皆既日食が起きた!

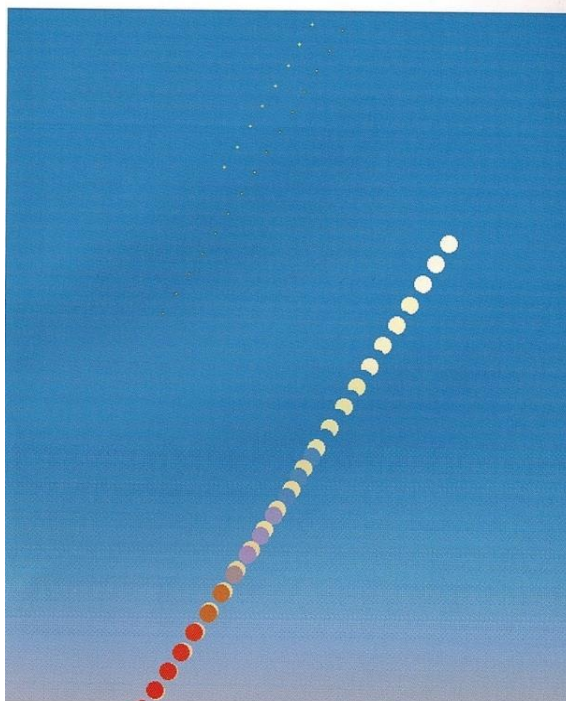
西暦247年3月24日の日食



福岡市西区：247年3月24日17時24分～18時27分。(22コマ、3分ごと)

247年の日食 福岡市の上では、皆既日食。奈良県の飛鳥の上では、皆既日食にならない。
(株式会社アストロアーツ社のパソコンソフト「ステラナビゲーター」による。打出圭一郎氏。)

西暦248年9月5日の日食



福岡市西区：248年9月5日5時57分～7時06分。(23コマ、3分ごと)

248年の日食 福岡市の上でも、奈良県の飛鳥の上でも、ほぼ皆既日食となる。

谷川・相馬氏らと安本美典氏の比較

年 月 日	時間(福岡市)	国立天文台報 14 卷 (2012)	安本美典氏	備 考
247 年 3 月 24 日 (中国暦 2 月 1 日)	17:24~18:27 (安本氏)	・北九州で皆既でないにしても深い日食であった。とくに北九州の島および北九州市は皆既日食 ・福岡、佐賀の食分は 0.99~0.98	・福岡市の上では皆既日食 ・奈良県の飛鳥では皆既日食にならない。	・皆既日食に近い部分日食 ・日没時の恐怖感
248 年 9 月 5 日 (中国暦 8 月 1 日)	05:57~07:06 (安本氏)	・近畿・九州いずれも皆既日食ではない。 ・近畿・九州とも食分は最大で 0.9	福岡市でも奈良県の飛鳥でもほぼ皆既日食	・明け方の日食 ・すぐに回復したため恐怖感は軽微か。

なお、247 年 3 月 24 日の日食について、中国の『三国志』には「正始八年春二月朔、日有蝕之」と記され、『晋書』『宋書』にも「正始八年二月庚午朔、日有蝕之」と記されている。中国の陰暦では、2 月 1 日に日食があったとされている。

以上のことを総括すれば、国立天文台の研究者および安本美典氏の研究結果からみて、天照大神の天の岩戸伝承は、やはり卑弥呼の死と関係している可能性が高いとみることができよう。

なお、247 年 3 月 24 日(中国暦では 2 月 1 日)の日食について、「国立天文台報 14 卷」(2012)では「福岡市方面では皆既日食にはならない」とされるが、視覚・聴覚・嗅覚を含め、現代人にくらべてはるかに自然現象に鋭敏であった古代人が、太陽の異変に気づかないはずはない。沙漠の民のなかには視力 9.0 を誇る者がいて、沙漠のちょっとした異変にもすぐ気づいたといわれる。

司馬遼太郎の『街道をゆく・モンゴル紀行』のなかでも、奥さんがテントの陰で放尿したところ、それを沙漠のはるか向こうから見ていたモンゴル人の男たちがいつの間にか集まり、尿占いをしていたというエピソードが紹介されている。

古代人にとって、皆既日食であろうと部分日食であろうと——いずれも天地を揺るがす大事件であったはずである。

卑弥呼の死因

『魏志倭人伝』の「以て死す」という表現は、死因にまでは触れていないとみているが、卑弥呼＝天照大神を前提に、天の岩戸が日食による死をあらわす事件とみれば、その死因については、次の 2 つのケースが考えられよう。

(1) 自死もしくは他殺

卑弥呼＝天照大神が日食によって死去したのであれば、自死か他殺の可能性が大である。

(2) 自然死

天の岩戸が「巨星墜つ」というような意味で日食と無関係であれば、自然死の可能性が大である。

中国の『魏志倭人伝』は 247 年に卑弥呼が死去したことを告げ、しかも、安本美典氏や国立天文台の研究者などによれば、その年には皆既日食に近い日食が確かに起きている。

日本の『古事記』『日本書紀』の天の岩戸は、日食と天照大神の死との関連性を強く示唆している。

日本と中国のまったく異なる情報源が、日食と卑弥呼＝天照大神の死を指し示している。

よって、卑弥呼＝天照大神は、247 年 3 月 24 日 (中国暦では正始 8 年 2 月 1 日) の日食を受けて、自死したか、殺害された可能性が高い。

ひょっとしたら、卑弥呼＝天照大神は太陽を守護する「持衰（じさい）」ではなかったのか。太陽に異変があれば死ななければならない。

(以下、つづく)